

## “ Wakefield ” — 考察 ウエイクフィールドの正体

野呂 浩\*

### A Study of “ Wakefield ”

—The Shadow of Nathaniel Hawthorne in Wakefield—

Hiroshi Noro\*

The main protagonist Mr. Wakefield absented himself from his home for twenty years, with the eccentric behavior of observing his wife from the next street. Most readers are apt to interpret this work as a kind of a moral story of the middle-aged gentleman Wakefield, who enjoys peeping on his wife for such a long time.

On a superficial level, it may be true; however, the moral reading cannot reveal the depth of the story. In order to find out the true identity of Wakefield, this story needs to be analyzed in relation to the angst of the author of the story Nathaniel Hawthorne.

The most crucial problem of Wakefield is that he isolates himself into a special place where he does not share the joys or sorrows of the world. From this place he has the privilege of looking at his wife, but this is possible by making sure that he is not observed at all by his wife. This kind of scrutiny does not produce any human communication, only making the partner an object of his observation.

This unique problematic obsession is very similar to Nathaniel Hawthorne's own pain. He has already had long years of isolating experience and suffered from the fate of not sharing the joys and sorrows of the world. He was afraid that this was probably an inherited blood disorder carried through from his sinful ancestors and this involved the judgment of the witches, but as a storyteller Nathaniel Hawthorne knew well that he could not abandon his fateful habit of this observing behavior.

Therefore, this story is a reflection of Nathaniel Hawthorne's unavoidable experience and decision of living as a storyteller. In this sense, Wakefield can be said to be Nathaniel Hawthorne's self-image observed by Nathaniel Hawthorne himself. Wakefield is an important original character type, who can possibly become a hint for interpreting other works by Nathaniel Hawthorne.

#### I

米国の19世紀作家ナサニエル・ホーソンの短編小説“Wakefield”は、最初1835年5月に*New-England Magazine*に発表され、その後、1837年には*Twice-Told Tales*に収められた作品である。主要な登場人物はロンドンに住む中年夫妻である

ウエイクフィールドとウエイクフィールド夫人の二人だけである。夫ウエイクフィールドは、十月の黄昏れどき、ウエイクフィールド夫人に、夜行の乗り合い馬車で3、4日くらい田舎へ出かけるが、帰りが何日か遅れても驚いてはいけぬ、と言って自分の家を出て行くのである。結婚して10年も経つ

\*1 東京工芸大学工学部基礎教育センター教授  
2003年9月10日 受理

夫婦らしくごく自然に別れのキスをウェイクフィールド夫人は受ける。夫ウェイクフィールド(以後特に紛らわしい場合を除いてはウェイクフィールドと表記する)は、丸々1週間家を空けて善良な妻を慌てさせてやろうとの魂胆がある。<sup>1)</sup>それならば、自宅からかなり遠く離れていくのかといえ、そうではなく、自分の家とわずか通り一つ隔てたところに部屋を借りて住むのである。そしてウェイクフィールド夫人を20年間にもわたって観察するという奇妙な生き方を継続するのである。そして、姿を消してから20年経った秋のある日の夕方、まるでわずか1週間しか留守にできなかったかのように妻のもとに戻ってくるのである。

このような粗筋を知ると、ナサニエル・ホーソンの作品には必ず存在するといってもよい、「曖昧性」、「多義性」がない物語にも思える。つまり、単に、妻を長年にわたって観察するという変態男ウェイクフィールドの物語にすぎないと結論づけたくもなる。しかし、ナサニエル・ホーソンの文学作品を読み解く際には、そのような「わかりやすさ」を安易に受け入れられない。20年も自分の妻を観察し続けるのだから、その異常性に驚かない読者はいないだろう。しかしながら、そうした通常の常識では想像できないウェイクフィールドの長期の観察行動の含意する意味を冷静に分析する必要がある。

文学作品を創造する作家が、その作品をとおして何かを伝えようとしていると考えて作品を読もうが、あるいは、作品自体が作者の意図と独立している世界と見て作品を読もうがそれは読者の自由であろう。しかし、作品に用いられている言語からして、作品が誕生した時代の言語使用、価値観などの影響を無視することは到底できない。いわゆる歴史的な側面をも十二分に踏まえ、かつ、作家独自の創造部分にどのような見解を読み取れるのかを解釈しなければならないのである。

今回分析する短編小説のウェイクフィールドとウェイクフィールド夫人の諸々の特徴、そしてさらに、物語全体の展開等にも、この作品を執筆した作家自身の影が微妙に投影されているのである。したがって、ナサニエル・ホーソンの生きざま、および内面に抱えていた葛藤のような意識までも念頭において精読するとき、はじめて作品としての生命を帯びてくるのである。今回は特にこの問題に焦点

を当てて考察し、そのような読みに妥当性があるのか、さらに、このアプローチによっていかなる解釈を導き出せるか、もちろん、作品の内容を参照しながら論じてみたい。

## II

まず、最初に解明したいのは、ウェイクフィールドの行為は妻の視界から消える、いわゆる、蒸発であるのかということである。妻側からは、夫ウェイクフィールドの居場所、旅の明確な目的、正確な帰宅予定日さえも知らされていないわけだから、夫ウェイクフィールドは蒸発してしまったも同然である。妻が夫に特にそのようなことを訊ねた様子はないので、幾分不自然な印象を受けるが、妻は夫の邪気のない秘密好きを大目にみて、目顔で尋ねるにとどめたようである。

一方、ウェイクフィールドは妻のところから蒸発したとはいえない。計画的に自分の家庭との間に距離を置くわけだが、自宅からわずか通り一つ隔てたところに住むのである。物理的に割と近いところというにはもちろん意味があり、それは自分の妻を観察するために、自宅付近に何の苦労もなく近付ける距離だからである。物理的に近いだけでなく、妻の変化の一部始終を眺めるわけだから、ウェイクフィールドは自分の世界から妻を追放してはいないともいえよう。ゆえに、普通の意味での蒸発ではなからう。

しかしながら、夫側からは妻を観察することは可能であるが、妻側からは夫を観察できないという仕組みになっている。相手側に、覗いている行為を全く悟られず自由にその対象を覗けるのである。見る対象と一体化してしまうと、もはやその対象は視認できなくなるので、観察するためにはどうしてもある一定の距離を設けなければならないのである。

それでは、観察者ウェイクフィールドには、凝視する明確な目的があるのだろうか。それは自分が暮らしの中心であった世界が、自分が抜けることによってどのような影響を受けるかが知りたいのである(p. 134)。ウェイクフィールドには、自分の妻が死ぬ程の状態にならない限り戻る気持ちはない(p. 136)。この個所にウェイクフィールドの殺意が読み取れる、と即断する<sup>2)</sup>のは多少無理があるろうが、少なくとも、相手がより悶え苦しむにつれて、見る喜

びが一層増す、一種のサディズム、加虐性のような心の動きを感じ取ることは許されるのではなからうか。

妻を観察するウエイクフィールドが、妻に全く観察されなかったのかといえ、必ずしもそうではない。ウエイクフィールドが明確な理由も告げずに家を出ていく際に、夫の失踪後も決して忘れることのできない、夫の一つの特徴を妻は見逃していなかった。それは、夫が出かける際にドアの隙間から垣間見た夫の微笑みである。この微笑を浮かべながら妻のもとから去って行ったのである。この微笑みだけは、夫ウエイクフィールドが、妻に見られたことを知らずに、妻に観察された一つの特徴である。妻の記憶にこの狡猾そうな微笑みは残像として残り、妻としてよりも未亡人としての暮らしが長くなった頃でも、その微笑が繰り返し思い出され、夫を思い出す度に明滅するようになり、またおそろしい微笑になるのであった。妻が棺の中の夫を想像しても、あの別れのときの微笑の表情が死に顔に凍り付いているのである ( pp. 132-33 )。あるいは天国にいる夫を夢見る場合にも、祝福された魂は物静かではあるが、それでいてまだあの静かな狡猾そうな微笑を浮かべているのである ( p. 133 )。そういうことで、人々が夫ウエイクフィールドはもう死んだものと考えても、その微笑ゆえに、はたして自分 (ウエイクフィールド夫人) は未亡人になったのかときどき疑うのであった。家を出て行くときの微笑は、いよいよ妻に察知されることなく、妻の変わりようを覗ける機会を手にした喜びの表現であろうか。いずれにしても、妻にとっては、夫ウエイクフィールドという人物を一言で言い表わすとすれば、この「狡猾そうな微笑」とでもなるうか。

二人の夫婦関係を破綻させるような、性格の不一致とか家庭内暴力のような問題でもあるのかといえ、全くそのようなことはない。世の亭主族の中で妻を裏切らないことにかけては、彼の右に出る者はいそうもありません ( p. 131 ) と明言されているほどである。

このように考察してみると、妻を裏切る行為に走ることなど到底考えられない夫ウエイクフィールドなのに、彼に家を飛び出して、20年間も妻を観察する尋常ならざる行為に駆り立てたのは、本当に妻を観察するためだけののだろうかと思いたくなる。

よくもこれほどまでするものだと驚く程、作品中に、ウエイクフィールドに、妻に自分を察知されないための涙ぐましい策略を断行させている。ウエイクフィールドは慎重に熟慮した結果、新しい赤毛の鬘やいつもの背広とは毛色の違う洋服を選びだして身につけたのである。その結果全くの別人に変身してしまったのである ( p. 135 )。また、このような場面も織り込まれている。ウエイクフィールドは家を出てから10年が経過したある日に、ある歩道で、偶然すれ違う瞬間、妻の手が自分の手に触れ、群集に押されてやむなく妻の胸が夫の肩に当たる。二人は立ち止まり顔を見合わせ、互いの目をじっと覗き込む ( p. 137 )。当然、妻はすぐに夫であることに気づいただろうと思うだろうが、そうではないのである。妻は何事も無かったかのように同じ足取りで、そのまま教会に行き、教会の入り口で立ち止まるとまごついた視線を通りに投げかけるだけであった。妻の手と胸の感触、目ももちろんウエイクフィールドは忘れるはずもないが、妻は夫ウエイクフィールドの手と肩に触れても、さらには目をじっと見ても夫だと気づかないのである。「まごついた視線」とは心憎い表現である。一方、夫ウエイクフィールドの顔つきは、びっくり仰天している表情かと読者は想像するだろうが、実は多忙なロンドン人が立ち止まってじっと見送るほど凶暴であるとの説明が挿入されている ( p. 136 )。外面的に変装することによって、目はもちろん手や肩の感触までは変えられるはずなどないのに、妻は夫を識別できないのである。ロンドンの人込みの中だからというだけでは納得できないのではなからうか。ウエイクフィールドは異なる服装を身につけ、鬘を使用することによって外面的に変装しただけでなく、そうしたことをする過程でいつの間にか、妻さえ認識できないような目つき、手や肩の感触を持つほど変貌してしまっていたと考えるべきではないか。まさに相手は完全に見えるが、相手に絶対に認識されない世界である。

夫婦二人の視線が合い、互いの目をじっと覗き込んで、片方が全く気づかないような場面をなぜかくもさりげなくナサニエル・ホーソンは創造できるのであろうか。この作品を執筆していた当時のナサニエル・ホーソンが、結婚して10年目くらいで、いわゆる倦怠期を迎えて強い蒸発願望に似た思いを押しさえ込むことができずに苦しんでいたとでも

したらまだ少しは頷けようが、ナサニエル・ホーソンは、後で少し詳しく触れるが、この作品を書いていた時期は、実は世間との接触を断つ生活をしていたのである。そして、後で結婚することになるソフィアをまだ全く知らないときにこの奇怪な夫婦物語“Wakefield”を書き上げているのである。一体これほどまでに、妻に観察されないようにあの手この手を使わせ、変装させてまで妻を観察する人物を創造することにいかなる意味が込められているのであろうか。

### III

何かを観察するには当然のことながら観察する対象を必要とする。そしてさらに、観察するためにはある程度の距離が絶対必要であることはすでに論じた。もし、かりに、その対象と一体化してしまい、つまり、対象と区別できないほど融合するならば結果的に観察できなくなってしまうことにも言及した。別な言い方をすれば、見るための距離がなければ、相手が見えなくなり、対象を見る喜びも体験できなくなるのである。

ところで、見て喜ぶ側にまったく問題性がないのかというと決してそうではない。ウェイクフィールドの場合には、これもすでに言及したが、見る対象に自分が絶対見られないことが必要なわけだから、見る対象との間に何らかの相互方向的な人間のかかわりが生じる余地はない。見られる対象は見られているということさえ知らないわけだから、あくまでも見る側のための見られる対象物にすぎない存在となる。物語の夫婦二人も、観る・観られる、観察する・観察されるだけの関係なので、互いを結び付けるコミュニケーションは成立していない。いや、意思疎通が成立しない以上の危険を結果的にもたらず可能性があるだろう。

ウェイクフィールドがいなくなってから3週目には薬剤師が、翌日の夕方には医者も妻のもとに来る。しかも、葬式の前触れとおぼしき医者が姿を現したと表現されている(p. 136)。妻は死ぬのだろうかと思われぬような念もウェイクフィールドは抱くが、こうした大変なときに邪魔すべきではないと自分の良心に言い訳して、自宅に戻らないのである。まさに、観察する対象の変化を眺めているだけだと、対象が危険に晒された際に助けの手を差し伸べる

どころか、対象の死さえも黙認することになりかねない。見るだけの行為には、間接的な殺人者と成りうる危険性すら潜んでいるのである。もちろん、このような冷酷性に対して、ウェイクフィールドが平然としているわけではないし、物語の語り手も肯定しているわけではない。語り手はウェイクフィールドに対して、ごく普通の生活に戻るように繰り返し警告を与えている。ウェイクフィールドも、自分の観察行動に胸が潰れるほどの思いを抱いて最初の夜は早めに床につくのであった。第一夜、一人寝は今夜かぎりによろしくと決断して眠るのであった。ウェイクフィールド自身も自分の行為の問題性を自覚はしているのである。

自宅との隔たりはたかが隣の通りではないかと思うだろうが、実は渡ることが不可能に近い深淵である、愚か者め、家があるのは別世界なのだよ、と語り手がウェイクフィールドを非難、嘲笑している。10年間別れて暮らしたあと、ある歩道で偶然妻の胸が肩に触れ、互いの目をじっと見つめる機会があっても、貸間に吹っ飛んで帰るウェイクフィールド自身に、おのが人生の惨めな異様さを自覚させ、「ウェイクフィールド、ウェイクフィールド！君は狂っているぞ！」(p. 136)と叫ばせてもいる。

このように眺めてみると、ウェイクフィールドが見つめている対象は一体本当は何なのかを突き止めたくなろう。対象は妻である女性である。したがって、結婚経験のないナサニエル・ホーソンが創作した男性の視姦(窃視症)の物語ではなからうかとも考えたくもなるがそうであろうか。

### IV

米国にも、女性たちの悲惨な歴史がある。そして、ナサニエル・ホーソンの先祖がそのような迫害に深くかかわり、処刑にも同意した歴史的事実がある。例えば、クエーカー(女性)教徒たちへの鞭打ち刑を命じた、ホーソン家アメリカ初代のウィリアム・ホーソン(1607-1682)<sup>3)</sup>17世紀のセイラム魔女裁判に判事としてかかわり、18回くらい絞首刑に立ち会ったといわれる、二代目ジョン・ホーソン<sup>4)</sup>さらには、妻の二人の姉(一人は独身、もう一人は結婚して身籠っていた)と不義密通の関係を持ったとして訴えられた、母方の先祖ニコラス・マニング(1644-?)<sup>5)</sup>などもいる。

彼は逃亡したが、二人の姉は捕らえられて、裁かれ、公衆の刺すような視線に晒されるのである。ナサニエル・ホーソンは、こうした先祖の「迫害者気質」の血を受け継いでいることを呻吟し、先祖の罪業ゆえの呪いが消えさることを切に願っていたのである。<sup>6)</sup>

このような歴史が、今回分析している作品の中ですぐに分かるような形で扱われているわけではない。しかも、舞台は英国のロンドンであり、結婚10年が経過した夫婦にかかわるものである。ナサニエル・ホーソンの物語には結構女性を覗く男性人物が登場してくるが、それはただ単に女性に関心ある男性を描いているというよりは、女性を迫害した先祖の消し難い罪業の歴史で悩むナサニエル・ホーソンの意識のようなものが下敷きになっていると読むと作品がよく理解できる場合が少なくない。とするならば、物語に登場するウエイクフィールドが、ナサニエル・ホーソンの先祖という設定ではもちろんないが、妻が死にそうになっても帰宅せずその様子をじっと覗き見る行為に、ナサニエル・ホーソンの先祖の迫害心、殺意の眼差しのようなものを、決して露骨な形ではないが、微かに忍ばせていると読んでも差し支えないのではなからうか。失踪後10年経過した後に妻と偶然出会った際のウエイクフィールドの目つきは、ロンドンの人々が立ち止まって見送る程の野蛮な目であった。この目とはいかなる目であらうか。物語の前後関係と作家の先祖の罪業などを勘案して考えるならば、相手を覗き見る喜びの延長線上、あるいはそうした観察する行為の奥に潜む、迫害、殺意に近い心理を表す眼差しを示唆しているのではなからうか。このように理解すると、ウエイクフィールドの眼差しは、ナサニエル・ホーソンの先祖の眼差しとも重なってくる。

ウエイクフィールドは加害者として描かれている。しかし、妻はそのような夫の仕業に屈して衰弱死するどころか、寡婦としての生き方に比較的早く馴染むのである。このような描き方の違いを見ると、魔女裁判の歴史を直接書いているわけではないが、相手の存在を否定しかねない「観る」側により重大な問題性を指摘し、「観られる」側には観る側の異常さに屈しない力強さを付与しているといえまいか。作家が意識して書いたかどうかは知る由もないが、魔女裁判についてのナサニエル・ホーソンの考え方のようなものをこのような描写から微かに読

み取することはできよう。また何も無理矢理に女性迫害に絡めなくても、ナサニエル・ホーソンなりの人間観の一端を垣間見ることができるかもしれない。もちろん、それを実証できるのかと問われれば、作品を全体的に眺めれば、色濃く作家の生きざまを反映しているのが、ナサニエル・ホーソンの見解といっても差し支えないだろうという程度のことである。

しかし、それならば、この物語は、魔女裁判、あるいは、ナサニエル・ホーソン自身の人間観が反映された作品で、ナサニエル・ホーソン自身の生き方には直接結びつかないのであろうか。いや決してそうではないのである。

大学時代のナサニエル・ホーソンのあだ名は「世捨て人」であった。<sup>7)</sup> 1825年にボウドウィン・カレッジを卒業後、彼はおよそ12年間、作家修業のために、生まれ故郷セイラムの陰鬱な一室に閉じ籠りもっぱら読書と創作活動に専念するのであった。そして、“Wakefield”は、そうしたいわば隠遁生活を10年くらい経験した頃の1835年に最初に発表された作品である(もちろん、実際に執筆された時期は1832-33年か1833-34年の秋か冬と考えられている)<sup>8)</sup>とするならば、世間との接触を断って修行する部屋に閉じこもるナサニエル・ホーソンの姿も幾分投影されているのではないだろうか。

世間との関係を断ち切ったかのような12年にもおよぶ生活に終止符を打とうとしている、1837年に、ナサニエル・ホーソンは友人のロングフェロー宛の手紙に、自己監禁という感覚について次のように吐露している。「...フクロウのように薄暗くなるまではめったに外出しないのです。...私は人生の主流からわきへそれてしまい、もう戻ることは不可能です。...私は社会から隠遁してしまったのです、そんなことをしようなどとは決して思わなかったのに、...自分自身の虜となり、自分を地下牢に閉じ込め、自分がそこから出る鍵を見つけることができないのです。もしドアが開いたとしても、恐ろしくて出ていけない。...喜びや悲しみを分かち合わないことほど恐ろしい運命はこの世にはない...この10年の間、私は実際に生きてきたのではなく、ただ生きることに夢見てきただけなのです。...老後の財産となる心地よい思いでなど、私はまったく経

験してこなかったのです」<sup>9)</sup>と突に痛々しい、嘘偽りのない告白がしたためられている。今回分析している作品が最初に発表されたのはこの手紙の2年前の1835年である。妻から、つまり、自分の所属する世界から自分を隔離して、妻を、世間を、最初1週間くらいの感覚で観察している内に、10年、20年という年数が経過してしまうウェイクフィールドと、陰鬱な部屋に隠遁して、その部屋から世間を眺めて、世間の喜び悲しみを共有しないうちに10年以上もの年月が経過してしまうナサニエル・ホーソンの姿とが重なるではないか。先に触れたように、もちろん、ナサニエル・ホーソンは結婚していたわけではなく、したがって、妻を観察した個人的体験はないわけだが、自分が属するもっとも身近な世界を、妻で表しているとしたら、まさに、ナサニエル・ホーソン自身の体験がそのままそっくり作品化されていると考えたくなる程酷似している。この作品には、原資料として William King の *Political and Literary Anecdotes of his Own Times* (1818) 中の Howe という人物がある。<sup>10)</sup> Howe の失踪事件を参考にしたことは間違いなからう。Howe は、商用で出かけるといって17年間戻らなかったのである。彼は名前を変え、鬘をつけて、ロンドンの別なところに部屋を借りた。10年位経ってから、妻の隣人と知り合いになり、妻の部屋を覗くのである。後の7年は、St. James Church に毎日曜日礼拝式に参加し、妻に見つからないところに座って、密かに妻を観察していたのである。この実際にあった事件を参考にして、物語の基本的な枠組みを考えたのかもしれないが、肉付けは、作者自身の体験を反映したもので、真実味を備えたものになっている。体験した者でないと描けないような迫力と説得力が随所に滲んでいる。

ウェイクフィールドは、世間から自分を切り離し、姿を消し、生きている人々の世界における自分の地位を放棄してしまったのである。ウェイクフィールドは、妻の傍におり自宅の炉辺にいたのに、炉の暖かさも妻の愛も、感じることを禁じられているということになりましょうかとのコメントもある。すると、時間の長さや存在する場所が本質的な問題ではなく、近くにいる対象と心理的距離を保って常に観察の対象とだけにしてしまう、そのことを問題視しているようである。

ウェイクフィールドは別に本来の同情心を失ってはいないし、依然として人間的な興味も抱いているのに、彼の側からそうしたことに影響を及ぼす力をなくしてしまった、というのが彼の前代未聞の運命なのである。まさに、自分の属する世間へのかかわりを放棄してしまい、どのように自己監禁から脱出することができるのか分からなくなってしまっている、孤独な修行時代のナサニエル・ホーソンの姿とダブるのではないか。したがって、ウェイクフィールドは、ナサニエル・ホーソンの影をかなり背負わされた分身の人物であることはほぼ間違いないだろう。

しからば、それで私がこの物語のすべてを観察しつくしたことになるだろうか。すでに観察する行為のもつ意味合いについて若干は考察したが、それでは、観察する行為とは、ナサニエル・ホーソンの場合には具体的にどのようなことなのであろうか。

ナサニエル・ホーソンは作家修行のために一室に閉じ籠るような生き方を大学卒業後12年間も続けたのであり、その間主に歴史書等を多読したようである。過去の歴史を眺めるだけでなく、執筆するためにはどうしても観察することが必要である。その観察する眼差しは、これまでの考察ですでに指摘したように、観察される対象との結びつきを結果的に否定してしまうことにつながりかねない。観察の対象と観察する以外のいかなるかわりも構築できなくなることに、一種のうしろめたさ、罪悪感のような感情をナサニエル・ホーソンが抱いていたとしても何ら不思議ではない。したがって、ウェイクフィールドの眼差しに、ナサニエル・ホーソンの眼差しを、特に、10年程も世間との交渉を断ち、作家として観察する冷たい眼差しと似たような目をも認めることができる。ロングフエローへの手紙に書いたナサニエル・ホーソン自身の言葉を借りるならば、「世の喜びや悲しみを分かち合わない」生き方こそが、観察の眼差し、観察行動のもたらす問題性なのである。ナサニエル・ホーソン自身、作家として生きていくことを決断しているかぎり、問題を孕むこのような観察の眼差しを絶対に捨て去ることはできないことを十分認識していたのである。もしかすると、10年、20年、(世間の只中に戻ったとしても)いや一生涯世間と親密な関係を持ってなくなる恐ろしい運命をナサニエル・ホーソンはうす

うす感じていたようである。このようなジレンマ、葛藤もウエイクフィールドという人物に描き込まれているのではなからうか。

## V

このように論じてくると、ナサニエル・ホーソンの作品によく登場する、他者とのコミュニケーションができないような人物にも、ある意味が込められていることに気づくのではなからうか。観察し、見つめるだけの人物は必然的に人間的なコミュニケーションを構築できない。この短編小説は、作家ナサニエル・ホーソンが自分自身を観察し、その自分の姿をウエイクフィールドに描き、さらに物語の語り手にウエイクフィールドを観察させてそれを語らせるという、自伝的要素の濃い物語である。そして、ウエイクフィールドとウエイクフィールド夫人という二人の人物の扱い方の違いで一種の評価基準のようなものを示唆しているようでもある。ただ、このような構成を重要視し過ぎると、教訓物語として捉えてしまう危険性に陥ることに警戒しなければならない。とはいえ、他の作品解釈にも役立つヒントを持ち合わせている作品ではある。

例えば、ナサニエル・ホーソンの代表作である長篇小説『緋文字』の、アーサー・ディムズディル牧師やチリングワース医師らは、自らの素性を隠して、つまり、社会から自らを引き離して生き世間の喜怒哀楽を分かち合う人物ではない。最終的には、牧師は断頭台で息を引き取り、医師はその後、萎れるように亡くなる結末を迎えるのである。

それならば、『緋文字』のもう一人の重要登場人物である、ヘスターはいかなる人物と考えることができようか。その前に、もう少し、物語の最終場面における夫ウエイクフィールドの行動を注視してみよう。姿を消してから20年経過したある日の夕方、いつものように家の近くまで行ってみる。2階にある居間の窓越しに、陽気そうな夫人の姿が見える。たまたまそのとき降り出した通り雨がウエイクフィールドの顔と胸に正面から当たり、秋の寒さが体の芯にまで突き刺さるのである。やがてウエイクフィールドは自宅の階段をのぼり始めるのである。足取りは重く、語り手は、「ウエイクフィールド君、止まるんだ、君に残された唯一の家に戻るつもりなのか。それなら、自分の墓に行くがいい！」(p. 136)

とウエイクフィールドに厳しい言葉を浴びせる。ドアが空いてウエイクフィールドが中に姿を消すとき、また、20年前に出かけたときと同じく賢い微笑が浮かぶのである。この最終場面は、夫ウエイクフィールドの特質に特段本質的な変化はないが、帰ることは、世間と共に歩む大きな一歩を始めさせるということであろう。戻ったとしても例の不可思議な微笑はそのままなので、観察する習慣を葬り去ることができたわけではない。物語冒頭にある新聞か雑誌の記事には、20年以上も妻を置き去りにした男が、留守をしたのは一日だけという格好で静かに敷き居を跨いで戻り、死ぬまで愛情豊かな夫となった、と紹介されているが、ウエイクフィールドの場合の結末部分はそのようなハッピーエンディングな響きはない。

ウエイクフィールドが2階の妻のグロテスクな姿、ダンスを踊っている様子を窓越しに見るのだが、これを夫人の魔女的存在と読みたくもなるが、これまでの考察の流れから見れば、ウエイクフィールド夫人にそのような要素が多少はあることを臭わせながらも、結局は強く陽気に生きさせていると読むべきではなからうか。夫に蒸発された後、大変なショックを受けて薬や医師の助けも一時必要としたが、その後は、社会の中でたくましく生き続けたと推測される。このウエイクフィールド夫人の姿は、『緋文字』のヘスターと重なるのではなからうか。

先程論じかけたヘスターの問題に戻ることにしよう。彼女の場合には、牧師や医師のように、自分の醜い部分を隠すことはない。姦淫の罪を犯したことで社会から裁かれ、緋文字を胸につけて生きても、たといその社会から一時逃亡計画を立てたことがあったにしても、そして、一時米国社会を離れてもまた戻ってきて、自分が住む世界の人々の喜び、悲しみを分かち合う生き方を全うする人物として描かれている。すなわち、ナサニエル・ホーソンがウエイクフィールドに求めるような生き方、自分にも求めるような生活を、つまり、自分の所属する世界の喜び、悲しみを分かち合う生きざまを、姦淫の罪で裁かれた女性において実現させているのである。結局ウエイクフィールドよりは、ウエイクフィールド夫人の側にナサニエル・ホーソンは軍配をあげているような感がある。このことは、ナサニエル・ホ

ーソンが生きた時代と社会の価値観だけでなく、いや、先祖が消し難い汚点を残した時代の価値観をも根底からひっくり返したかのような強かな宣言である。したがって、単なるモラルの物語でもなく、あるいは、観つめる人物は駄目で、観つめられる人物の方がより善良な人間であるとかのレベルで読んでもならないのである。もちろん、あくまでも物語の主題、物語の背景となる歴史性等も十分に検討した上で、説得力のある解釈を引き出すべきであることは当然であるが。しかし、なぜ、こうした、実にアメリカ的な問題を背負うナサニエル・ホーソン自身の分身のようなウェイクフィールドをあえてロンドンに住ませたのだろうか、よく理解できないが、隣の通りに住んで妻を観察させる舞台装置としては、作品を執筆していた当時においては、米国の都市ではなく、英国ロンドンという大都会の雑踏がよりふさわしいということなのであろうか。

以上、これまで考察してきたように、この短編小説は、日常生活を逸脱したウェイクフィールドが“the Outcast of the Universe”になるモラルの物語<sup>1)</sup>というよりは、主に、作家として、どうしても何かを観察する人生を歩み続けなければならないがゆえの、悶え、うしろめたさのようなものをウェイクフィールドに投影した作品と読めよう。

したがって、物語の最後にある教訓めいた言葉、「混乱しているかのような自分たちの神秘的な世界の中で、個人は一つの組織に見事に適合させられ、さらに組織は別の組織とも適合し合い、一つの全体となっている。一瞬でもそこから離れてしまうと、自分の場所を未来永劫失ってしまう危険に自分を晒すことになる。その人はウェイクフィールドのように「宇宙の追放者」になるかもしれないのです。」(p. 140)という、教訓めいた言葉も、一義的には、ナサニエル・ホーソン自身に発せられたものであろう。

このような観察結果を、ウェイクフィールドは覗き見て、同意の微笑を浮かべてくれるであろうか。

## 注

- 1) 使用テキストは、Nathaniel Hawthorne, “Wakefield,” *Twice-Told Tales*, The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne, IX. (Columbus: Ohio State Univ. Press, 1974), p.132. 引用はすべてこの版により、以下“Wakefield,”からの引用はページ数を括弧に入れて示す。
- 2) Andrew Schiller, “The Moment and the Endless Voyage: A Study of Hawthorne’s ‘Wakefield,’” *Diameter*, I (March, 1951), 7-12. Reprinted in *A Casebook on the Hawthorne Question*, ed by Agnes Donohue, (Thomas Y. Crowell Company, 1963), p. 113.  
“Wakefield at this point seems to be manifesting an unconscious desire to kill his wife.”
- 3) Robert L. Gale, *A NATHANIEL HAWTHORNE ENCYCLOPEDIA* (New York: Greenwood Press, 1991), pp. 217-218.
- 4) *A NATHANIEL HAWTHORNE ENCYCLOPEDIA*, p. 215.
- 5) *A NATHANIEL HAWTHORNE ENCYCLOPEDIA*, p. 301
- 6) The Centenary Edition of The Works of Nathaniel Hawthorne (Columbus: Ohio State Univ. Press, 1974), I *The Scarlet Letter*, p. 9.
- 7) 山本雅、「アメリカ社会の批評家としてのホーソン アメリカ社会とロマンス」淡水社、平成7年、p. 2.
- 8) Lea Bertani Vozar Newman, *A Reader's Guide to the Short Stories of Nathaniel Hawthorne* (Boston, G.K. Hall Co, 1979), p. 311
- 9) The Centenary Edition of The Works of Nathaniel Hawthorne (Columbus: Ohio State Univ. Press, 1974), XV *The Letters 1813-1843*, p. 251.
- 10) Lea Bertani Vozar Newman, *A Reader's Guide to the Short Stories of Nathaniel Hawthorne*, pp. 311-12.
- 11) Richard Harter Fogle, *Hawthorne's Fiction: The Light & the Dark* (Norman: University of Oklahoma Press, 1952), p. 190.